

平成 4 年度
埋蔵文化財緊急発掘調査概報

豊嶋郡条里遺跡
吹田35・36号須恵器窯跡
吹田37号須恵器窯跡
垂水南遺跡
垂水遺跡
吉志部遺跡

1993年3月

吹田市教育委員会

序

大阪市の北側に隣接する吹田市は、交通の便に恵まれていることから、住宅都市として急速な変貌を遂げました。そのため、市内各地に埋蔵されている文化財は、実態が知られることなく破壊・埋没され、その多くが失われてきました。

このため、吹田市教育委員会では、文化庁や大阪府教育委員会の指導のもとに、昭和49年度以来、国庫補助事業として垂水南遺跡・垂水遺跡などの市内の埋蔵文化財の発掘調査を実施するとともに、文化財ニュースの発行・講演会の開催・説明板の設置・史跡七尾瓦窯跡環境整備事業などを推進し、より多くの人々に文化財に対する保護意識を高めていただくことに努めてまいりました。しかしながら、未だに文化財の保護については幾多もの課題が残されており、今後も文化財行政のあり方をさらに検討し、いろいろな条件の整備を図っていく必要性を感じるものであります。こうした歴史・文化遺産を守り、新しい世代に受け継いでいくという事業は行政機関が行つていけば成し得るという性質のものではなく、市民一人ひとりの御協力により推し進められていくものと存じます。皆様方におかれましても、なお一層の厚い御理解と御協力を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

平成5年3月

吹田市教育委員会

教育長 長光達郎

例　　言

1. 本書は平成4年度国庫補助事業として実施した、豊嶋郡条里遺跡、吹田35・36号須恵器窯跡、吹田37号須恵器窯跡、垂水南遺跡、垂水遺跡、吉志部遺跡の緊急発掘調査をまとめたものである。
2. 発掘調査地点は次のとおりである。

第1次 豊嶋郡条里遺跡	吹田市泉町2丁目2586-7, -12
第2次 吹田35・36号須恵器窯跡	吹田市原町2丁目2825-3, 2826-5, 2828-4
第3次 吹田37号須恵器窯跡	吹田市原町2丁目2888-3
第4次 垂水南遺跡	吹田市垂水町3丁目28-10
第5次 豊嶋郡条里遺跡	吹田市泉町2丁目3088-4, -6
第6次 垂水遺跡	吹田市円山町1667-5
第7次 垂水南遺跡	吹田市垂水町3丁目26-4
第8次 吉志部遺跡	吹田市岸部北1丁目157-1他5筆
3. 発掘資料の整理作業は、吹田市岸部北4丁目10番1号、吹田市立博物館内資料整理室において実施した。
4. 本文は、調査担当者である増田真木・田中充徳・賀納章雄が分担して執筆したが、吉志部遺跡出土石器の実測及び製図、原稿執筆は関西大学非常勤講師山口卓也氏にお願いした。各章の執筆分担は、第1・3・5・6章 田中充徳、第2・4章 賀納章雄、第7章2.b.出土遺物、石器の項は山口卓也、他は増田真木である。編集は田中充徳が行った。
5. 図中の方位は磁北を示し、標高はT.P.（東京湾標準潮位）を示す。
6. 発掘調査において、蘆田弘、清田健、山本貞雄、川崎進、福山亨、福山道子、藤井則彦、土井富子、関本良太郎氏をはじめ、多くの方々の協力を得た。記して謝意を表します。

発掘調査参加者名簿

調査主体 吹田市教育委員会 教育長 長光達郎

調査指導 大阪府教育委員会文化財保護課 主幹 堀江門也・技師 大野 薫

関西大学非常勤講師 山口卓也

調査担当 吹田市教育委員会吹田市立博物館文化財保護係 増田真木・田中充徳・賀納章雄

目 次

第1章 平成4年度埋蔵文化財発掘調査の契機	1
第2章 豊嶋郡条里遺跡の発掘調査	5
第3章 吹田35・36号須恵器窯跡の発掘調査	8
第4章 吹田37号須恵器窯跡の発掘調査	10
第5章 垂水南遺跡の発掘調査	13
第6章 垂水遺跡の発掘調査	17
第7章 吉志部遺跡の発掘調査	19

挿 図 目 次

第1図 発掘調査地点	3
第2図 豊嶋郡条里遺跡発掘調査地周辺図	5
第3図 第1期調査区平面図	6
第4図 第1期調査区土層断面図	6
第5図 第2期調査区平面図	7
第6図 第2期調査区上層断面図	7
第7図 吹田35・36号須恵器窯跡発掘調査地周辺図	8
第8図 調査区平面図	8
第9図 調査区土層断面図	9
第10図 出土遺物実測図	9
第11図 吹田37号須恵器窯跡発掘調査地周辺図	10
第12図 調査区平面図	11
第13図 調査区土層断面図	12
第14図 垂水南遺跡発掘調査地周辺図	13
第15図 第1期調査区平面図	13
第16図 第1期調査区土層断面図	14
第17図 第2期調査区平面図	15
第18図 第2期調査区土層断面図	16
第19図 第2期調査区出土遺物実測図	16
第20図 垂水遺跡発掘調査地周辺図	17

第21図	調査区平面図	18
第22図	調査区上層断面図	18
第23図	出土遺物実測図	18
第24図	吉志部遺跡発掘調査地周辺図	19
第25図	調査区平面図	20
第26図	調査区土層断面図(1)	22
第27図	調査区土層断面図(2)	23
第28図	石器実測図	25

図版目次

- 図版 1 豊嶋郡条里遺跡（第1期）
- 図版 2 豊嶋郡条里遺跡（第2期）
- 図版 3 S T35・36号須恵器窯跡
- 図版 4 S T37号須恵器窯跡
- 図版 5 垂水南遺跡（第1期）
- 図版 6 垂水南遺跡（第2期）
- 図版 7 垂水南遺跡（第2期）
- 図版 8 垂水遺跡
- 図版 9 吉志部遺跡
- 図版10 吉志部遺跡
- 図版11 吉志部遺跡
- 図版12 吉志部遺跡

第1章 平成4年度埋蔵文化財発掘調査の契機

吹田市では、昭和49年度以来文化庁及び大阪府教育委員会の指導を受けながら、埋蔵文化財包蔵地域内の個人住宅建築工事などの小規模開発に対し、国庫補助事業として緊急発掘調査を実施してきた。特に昭和51年度からは、開発の進行の著しい垂水町3丁目所在の垂水南遺跡を中心に継続的に発掘調査を行い、遺跡の範囲や包蔵状況の確認に大きな成果をあげてきた。昭和55年度以降はさらに市内各所での開発行為の急増に対応する必要性が高まり、垂水南遺跡に限らず、市内各所にある全遺跡に対しても事業を拡大した。近年では、吉志部遺跡、垂水遺跡、藏人遺跡、吹田32号須恵器窯跡、七尾瓦窯跡隣接地等の発掘調査を実施した他、吹田53号須恵器窯跡などのように新規に発見された遺跡についても行い、多くの成果をあげることができた。

平成4年度は、豊鳴郡条里遺跡、吹田35・36号須恵器窯跡、吹田37号須恵器窯跡、垂水遺跡、垂水南遺跡、吉志部遺跡の6遺跡について、発掘調査及び試掘調査を実施した。

豊鳴郡条里遺跡は、吹田市泉町2丁目に位置する遺跡である。古代末期ではあるが、文治5(1189)年に作成された『摂津国垂水西牧坂郷田畠取帳』に条里の存在が詳細に記されており、これら文献史料等によって、吹田市西部から農中市南部にかけて広範囲に展開していた豊鳴郡の条里東限線の位置が推定されていたが、吹田市泉町2丁目5620番地の1他において、昭和57から58年度にかけて実施された吹田市文化会館建設にともなう発掘調査により、その存在が明らかになったものである。

この調査では、近世水田下より土師器・瓦器・瓦質土器・舶載磁器・中国錢等の遺物の出土とともに、鎌倉時代を主体とする水路跡・畦畔等の遺構が発見された。水路は、その外側に幅約2.2m、最大高約0.8mを測る堤防を有する、幅約1.1m、深さ約0.5mの溝で、両岸には護岸施設を設けた痕跡が部分的に認められた。また、水路の方位はN-11°-Eを測り、豊鳴郡における既知の中世条里ラインと一致する方位を示した。これに対して、畦畔は水路の東側に2条、西側に3条検出されたが、水路を境として途切れたり、方位の異なるものが多く検出されており、条里ラインの不連続性が指摘された。豊嶋・鳴下両郡は地形上の制約から、異なる方位を示すとされており、今回発見された溝が中世期における両郡の境界線であることが判明した。当地一帯は住宅地に当たっており、近年まで大きな開発が行われなかったことから、昭和57年度調査以降、数回の試掘調査が実施されたに止まっている。しかし、これらの小規模の試掘調査では、いずれも二次堆積ではあるが、土師器・瓦器・瓦質土器・舶載磁器等の中世期の遺物が多量に出土しており、単なる条里遺跡というだけでなく、当遺跡の近辺にこれらの遺物を産する集落などの遺跡が存在する可能性も考えられる。

今年度は、昭和57年度調査地点に隣接する泉町2丁目2586-7,-12及び同3088-4,-6において、個人住宅の建替が計画され、兩地点とも遺構・遺物等の存在が予想されることから調

査を実施した。

吹出35・36号須恵器窯跡（以下、S T 35・36とする。）は、吹田市原町2丁目付近に所在する古墳時代の遺跡である。馬池の西北側の丘陵付近に並列に構築されていたが、それ以後発掘調査が行われることなく、昭和42年に行われた宅地造成工事のために破壊された。

現在、当地一帯は住宅街となり、旧地形の面影は残されていないが、包蔵地域内に位置する原町2丁目2825-3、2826-5、2828-4において、個人住宅の増築工事が計画されることとなつたため調査を実施した。

吹田37号須恵器窯跡（以下、S T 37とする。）は、吹田市原町2丁目付近に位置する宮ノ谷池西方の丘陵斜面上に築かれていた。昭和43年の造成工事の際、府立茨木高校歴史研究部・市立第5中学校により発掘調査が行われた。破壊寸前に窯体を検出した他、多数の須恵器が出土したが、調査終了後窯体・灰原ともに破壊された。出土遺物の一部は、第5中学校で保管されていることが平成元年に高畠教諭を通じて明らかになった。その後、本市教育委員会へ寄贈され、現在は吹田市立博物館に収納されている。S T 37については、千星古窯跡群の吹田市域に分布するものの中では早い段階に築造されたものとする成果が得られたが、本市においては、その大半が調査を行うことなく消滅しており、数少ない貴重な成果である。

今回の調査は、このS T 37が所在した地域に当たる原町2丁目2888-3において、開発計画がもたらされたことから、調査を実施したものである。

垂水南遺跡は、吹田市南部に広がる低湿な沖積平野上に位置する複合集落遺跡である。昭和41年度から行われた区画整理事業による下水管埋設工事の際に、在地研究者の若村正博氏によって発見された。しかし、当時は本格的な発掘調査が行われるまでには至らなかった。その後の昭和51年度から、垂水南遺跡の所在する垂水町3丁目一帯の開発の進行に対応するため、国庫補助事業による緊急発掘調査を開始することになった。同年6月に垂水町3丁目25-13で行われた第1次調査以後、平成4年度に至るまでに、合計42次の発掘調査が実施された。

垂水南遺跡については、これまでの調査により、断続的ではあるが、弥生時代・古墳時代・平安時代・鎌倉時代の遺構・遺物が検出されている。これらの時代のうち、古墳・平安時代の検出が顕著である。

古墳時代の遺構面では、土器・玉類や木製品などの多量の遺物とともに、住居跡・柱穴・土坑・井戸・溝・畦畔・護岸施設などが検出されており、当遺跡中で傑出した内容を誇っている。

また、平安時代の遺構面からは、河道跡やこれに付随する木組み・堰などが検出された他、この河道内からは土師器・須恵器・施釉陶器・青磁などの多彩な遺物とともに出土した墨書き器の内容により、弘仁3(812)年に立証した東寺領垂水荘に関連する遺物であることが明らかになり、平安時代初頭における莊園の実態を知る上で貴重な成果を示している。

近年、これまで散在的に残されていた水田部分にも開発が進行してきた。垂水町3丁目18-5及び同31-8で行われた第38・42次の発掘調査地点からは、井戸・溝や上器群などが検出され、それまで知られていた遺跡の範囲がさらに西方へ拡大することがわかつてきており、当遺

路の広がりについて新たな認識が必要であると考えられる。

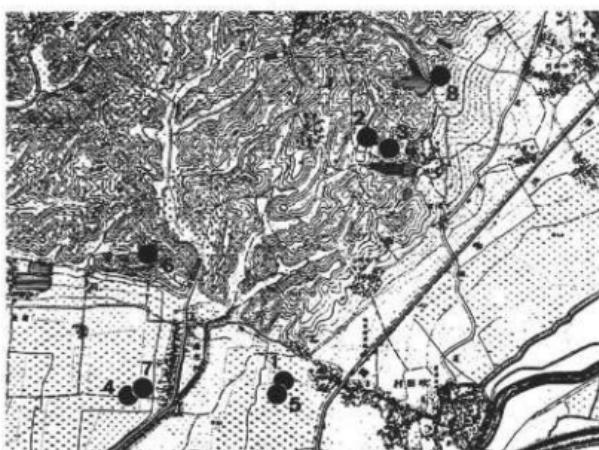
垂水町3丁目28-10及び同26-4において、開発計画がもたらされた。両地点は遺構が検出された第7・9・18・24・39・42次調査等の古墳時代の集落の中心地とみられる地点に近接し、遺構・遺物の包蔵の可能性が十分にあることから調査を実施した。

垂水遺跡は、垂水町1丁目から円山町にかけて広がる遺跡である。この遺跡は、昭和初期の住宅開発の際に弥生式土器が出土し、その存在が明らかになったものである。昭和30年すぎから行われた総合グランド建設工事に伴い、遺跡の西半部が大きく削られ、その大半が十分な調査を受けることなく、壊滅的な打撃を被った。

垂水遺跡に対して本格的な発掘調査が行われ始めるのは昭和48年からである。昭和51年までの4年間に関西大学と吹田市史編纂室・吹田市教育委員会による合同調査が実施され、弥生時代後期の竪穴式住居跡4棟・掘立柱建物跡・焼土坑・土壙墓などの遺構を検出するとともに、前期から後期にかけての弥生土器が多量に出土した。これにより垂水遺跡が千里丘陵東南端に位置する弥生時代の高地性集落であり、大阪湾岸に広がる遺跡群の中で重要な位置を占める遺跡であることが明らかになった。また、室町時代を中心として、中世の墓跡・小祠跡・竈跡などの遺構が検出されており、歴史時代に統く複合遺跡であることも確認された。

その後の円山町一帯における住宅の建設等により、試掘調査や立会を実施してきたが、これまでの調査では明確な遺構や遺物の出土は認められておらず、現在この地域では垂水神社境内が唯一旧状を残すところと考えられる。

しかし、垂水神社東方の丘陵裾部において実施された昭和56年度調査地点では、溝・土坑・



第1図 発掘調査地点 (1:40,000)

- 1.5. 豊嶋郡条里道路 2. 35・36号須恵器窯跡 3. 37号須恵器窯跡
4.7. 垂水南遺跡 6. 垂水遺跡 8. 吉志郡遺跡

柱穴等の遺構を検出するとともに、垂水神社と関連する寺院の存在を想定できる平安時代後半期の遺物も認められた。これを契機として、丘陵南側の平野部にも積極的に調査を実施していくこととなり、その後の昭和62年度に丘陵南の平坦部における個人住宅建設工事に伴う発掘調査が

行われて以降、継続的に調査が実施され、現地表下約1.5~2.5m前後で条里地割の展開方向に合致する中世の溝を検出し、現地表下約2.5~3.0m前後からは古墳時代の杭列を検出した。そして、さらに下層の現地表下約3.0~3.5m前後においては、弥生時代の遺物包含層とともに、主軸を北から西へ約35°振る、底面幅約45cm、深さ約80cmを測る溝を検出した。この溝の方位は時代が異なるものの、垂水南遺跡の古墳時代遺構と展開方位がほぼ同じであり、同様な地理的な環境のもとに集落が営まれていたことが想定される。

なお、昭和62年度発掘調査では、第IV様式を主体とする多量の弥生土器が出上し、丘陵上で調査された弥生時代集落が最も繁栄した時期の前半の様相を示す資料として、垂水南遺跡弥生時代集落の発展の様相を知る上で大きな成果をあげた。

今年度は、平成3年度調査地点の南隣りに当たる円山町1667-5において、個人住宅の建設が計画された。当地点は遺構が検出された第1次調査地点に近く、遺構・遺物の包蔵の可能性も想定されることから調査を実施した。

吉志部遺跡は、吹田市岸部北1丁目302、303番地を中心に展開する旧石器時代の遺跡である。現在は大阪府立吹田高校の北側の標高約20~30mの千里丘陵が沖積平野に向かって傾斜する緩やかな斜面に立地している。地形は周囲から迫る住宅化の波に押されて、旧来の地形を残す畠田も開発の進行に伴い、その姿を徐々に失いつつある。

これまでに出土した石器等の石器は、土地所有者の関本良太郎氏によって、昭和5年頃から始められた丹念な収集活動により、約半世紀にわたって約300点の資料が収集されたものである。その間、収集された石器は研究者の目に触れることもなく、また発掘調査が行われることもなかったが、昭和43年に当遺跡の北北東で行われた吉志部瓦窯跡の発掘調査を実施していた大阪府教育委員会の調査団に、収集された石器の一部が提示され、その中にナイフ形石器などの存在が確認されたことから、吉志部遺跡が府下でも有数の旧石器時代の遺跡として注目されることとなつた。その後も学校建設や宅地開発が急速に進み、遺跡周辺は景観が大きく変貌しており、遺跡保存の立場から早急な遺跡の範囲確認と、遺物の包蔵状況の把握が必要となってきた。そして、周辺地ではあるが、昭和50年度には住宅建設に伴って発掘調査が行われた。この調査では、旧石器・縄文時代の所見は得られなかつたが、中・近世の水田の開発状況を確認するとともに、弥生時代中期の土器が出土した。その後の昭和55・56及び平成2年度には、関本氏の協力を得て、遺跡の包蔵地域における水田部分での範囲確認及び遺物の包蔵状況の確認のために調査を実施した。昭和56年度調査ではサマカイト剝片4点、平成2年度調査では有舌尖頭器・削器等4点を確認し、大阪府下における旧石器時代の遺跡の中でもこの遺跡が重要な意義を持ち、今後も吉志部遺跡への対応が極めて重要なものであることを示した。

今年度に入り、関本氏から水田の中央部分の開発計画がもたらされた。当該部分は昭和55・56年度の調査で遺物の出土した部分を含むことから、慎重な対応が必要であると判断された。また、調査状況により比較的表層からも石器が検出される可能性が高いことから、小規模な開発においても遺跡の受け影響は重大であり、今回の包蔵状況の確認のため調査を実施した。

第2章 豊嶋郡条里遺跡の発掘調査

1. 調査の成果

発掘調査は、泉町2丁目2586-7他（第1期）と泉町2丁目3088-4他（第2期）において、平成4年10月30日と11月12日にそれぞれ試掘トレンチ1カ所を設定し、重機等を用いて実施した。

（1）第1期調査地点

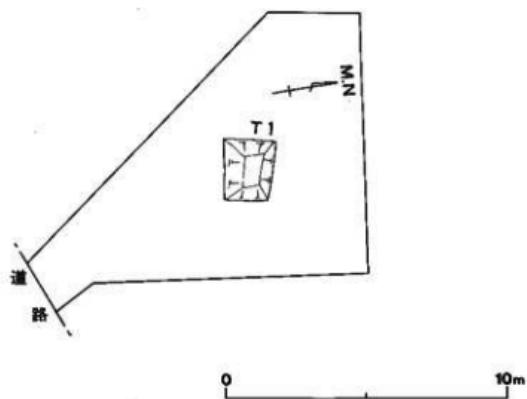
トレンチ内においては、盛土・旧耕土層以下、暗灰色・黒灰色の粘土、粘質土、砂質土がほぼ水平に堆積していた。そして、第5層より他所からの流れ込みと考えられる、土師器の細片2点と古銭の細片1点を検出したが、他に明確な遺構・遺物は確認出来なかった。

（2）第2期調査地点

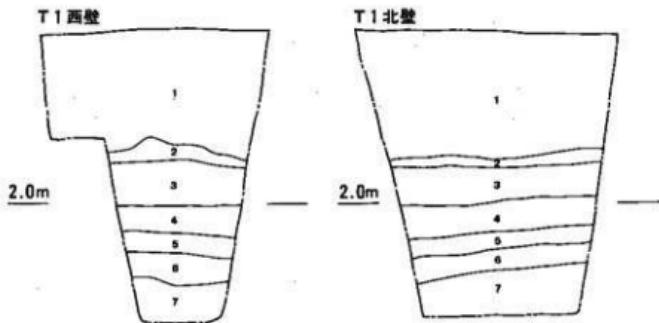
第2期調査地点における土層序は、第1期調査地点と同様に、主に灰色系の粘土がほぼ水平に堆積していた。そして、層位的に近世以降のものと考えられる土坑を2基検出したが、他に明確な遺構・遺物は認められなかった。



第2図 豊嶋郡条里遺跡発掘調査地周辺図 (1:5000)



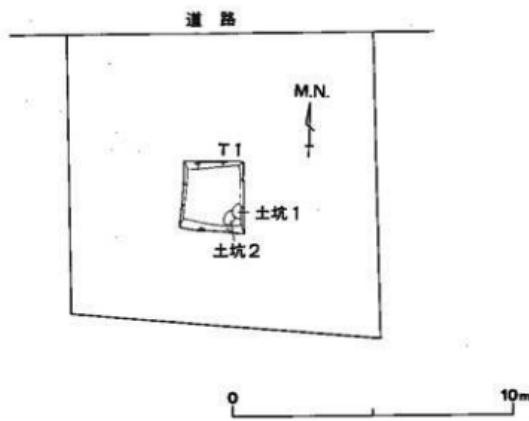
第3図 第1期調査区平面図



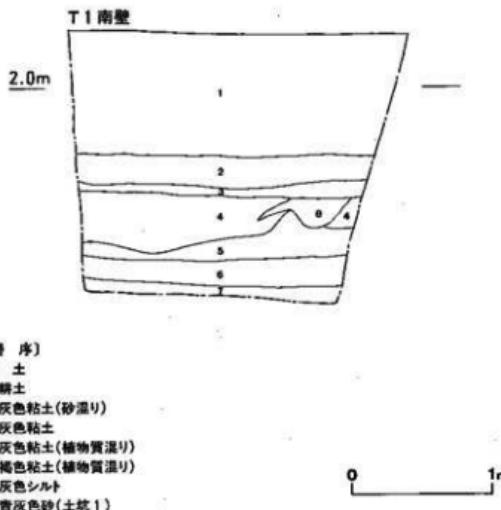
[土層序]

1. 盛土
2. 旧耕土
3. 暗灰色粘土
4. 暗灰色粘質土
5. 暗灰色砂質土
6. 黒灰色粘質土(砂混り)
7. 黒灰色粘土(植物質混り)

第4図 第1期調査区上層断面図



第5図 第2期調査区平面図



第6図 第2期調査区土層断面図

第3章 吹田35・36号須恵器窯跡の発掘調査

1. 調査の経過

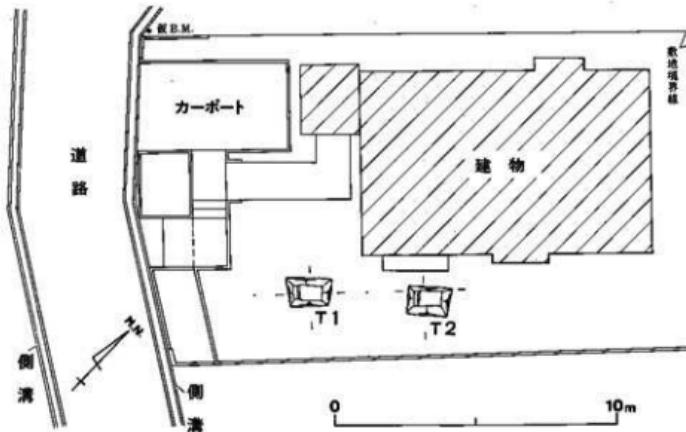
発掘調査は平成4年11月4日から5日にかけて、個人住宅の増築工事に伴う事前調査として、吹田市原町2丁目2825-3, 2826-5, 2828-4を対象に実施した。調査は、工事予定範囲内に約1×1.5mの調査区2か所(T1・T2)を設定し、人力で注意深く掘削した。そして、調査区内の検出状況について詳細に観察し、写真撮影、土層断面図・平板測量図の作成等の記録作業を行ったのち、埋め戻して調査を終了した。

2. 調査の成果

調査地内の土層序は、厚さ約10cmの表土層以下、黒灰色粘質土層(第2層)、淡黄色シルト層(第3層)、橙褐色粗砂層(第4層)、黄褐色粘質土層(第5層)、緑灰色粘質土層(第6層)、黄白色細砂層(第7層)、灰色粘質土層(第8層)、淡黄灰色粘土層(第9層)、淡灰色粘土層(第10層)、黄色粘土層(第11層)、濃灰色粘土層(第12層)など粘土・粘質土を主体とする層がやや斜方方向に(南東側に高く北西側に低い)堆積する状況が観察



第7図 35・36号須恵器窯跡発掘調査
地図(1:5000)



第8図 調査区平面図

できた。

また遺物については、第4～6・8層から近・現代のものと考えられる瓦・ガラスなどの破片に混ざって、古墳時代の上飾器・須恵器

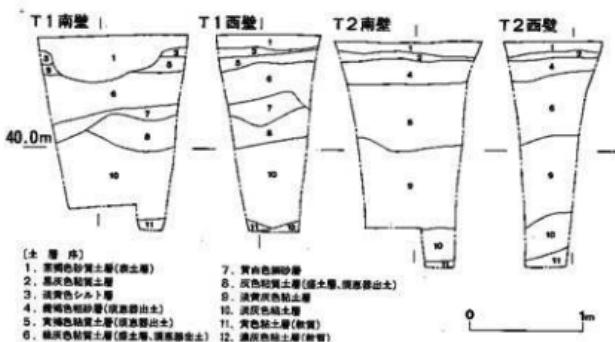
が出土した。これらの出土遺物のうち、須恵器が多く、蓋杯・壺蓋・甕など数器種にわたっていた。

3. まとめ

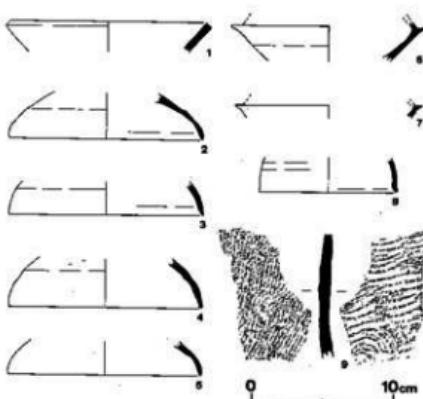
今回の調査では、地山とみられる第11層を除き、いずれも軟弱な粘土・粘質土を主体とする層で構成されており、また丘陵地という地形であるにもかかわらず、比較的緩やかな傾斜の堆積であることや古墳時代の遺物を含む層に近年の瓦・ガラスなどを含んでいることなどから、検出された層については、近年の宅地造成の際に盛土された層位であると考えられる。そして、これら

の層からは明確な造構は検出されなかった。なお、出土遺物は数量が少なく、いずれも小片だったことから明確ではないが、陶邑編年Ⅱ型式4～5段階の範疇にはいるものであり、6世紀後半から末期頃の所産と考えられる。

吹田市内では千里丘陵の南東側に沿って、千里古窯跡群と呼ばれる、須恵器の窯跡が広く展開している。今回調査を行った地点は、吹田35・36号須恵器窯跡が存在したところで、原町を中心に分布する、馬池支群に属している。この支群に属する窯跡は、これまでの調査から、最盛期にあたる6世紀後半の操業とされており、今回出土した須恵器がこれとほぼ同時期であることがわかった。このことから、出土遺物が35・36号須恵器窯跡で焼成され、開発造成の際に盛土層の中に埋没した可能性が考えられ、遺跡の遺存状況を考える上で貴重な成果だった。



第9図 調査区土層断面図



第10図 出土遺物実測図

第4章 吹田37号須恵器窯跡の発掘調査

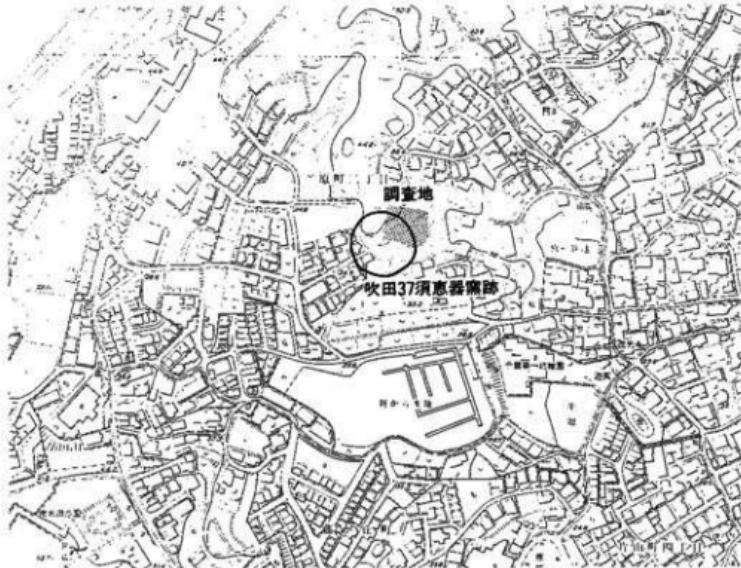
1. 調査の経過

吹田37号須恵器窯跡は、昭和43年に行われた造成工事により破壊を受けたが、破壊寸前に発掘調査が実施された窯跡である。その結果は「千里古窯跡群」にまとめられ、早くから破壊された窯跡としては、その構造を伺い知ることのできる数少ない例となっている。今回の調査は、窯跡に関わる遺構・遺物等の痕跡の有無を確認することを目的として、平成4年11月10日に実施した。

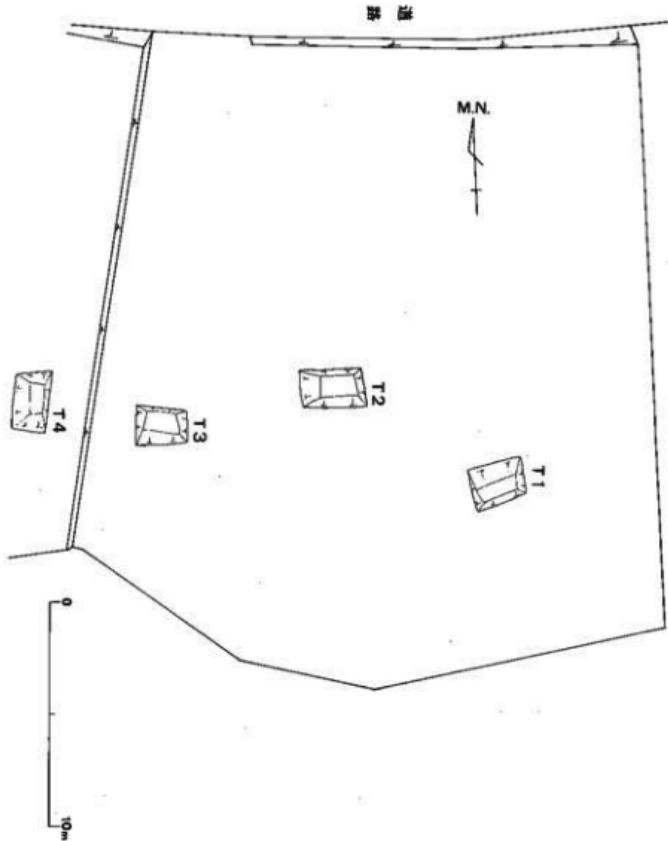
2. 調査の成果

調査地内は造成のため、1段差を有するテラス状の地形となっている。今回の調査におけるトレント設定としては、予定の建築物にかかる部分について、下段部に3カ所（東からT1、T2、T3）、上段部に1カ所（T4）設定し、重複を用いて調査を実施した。

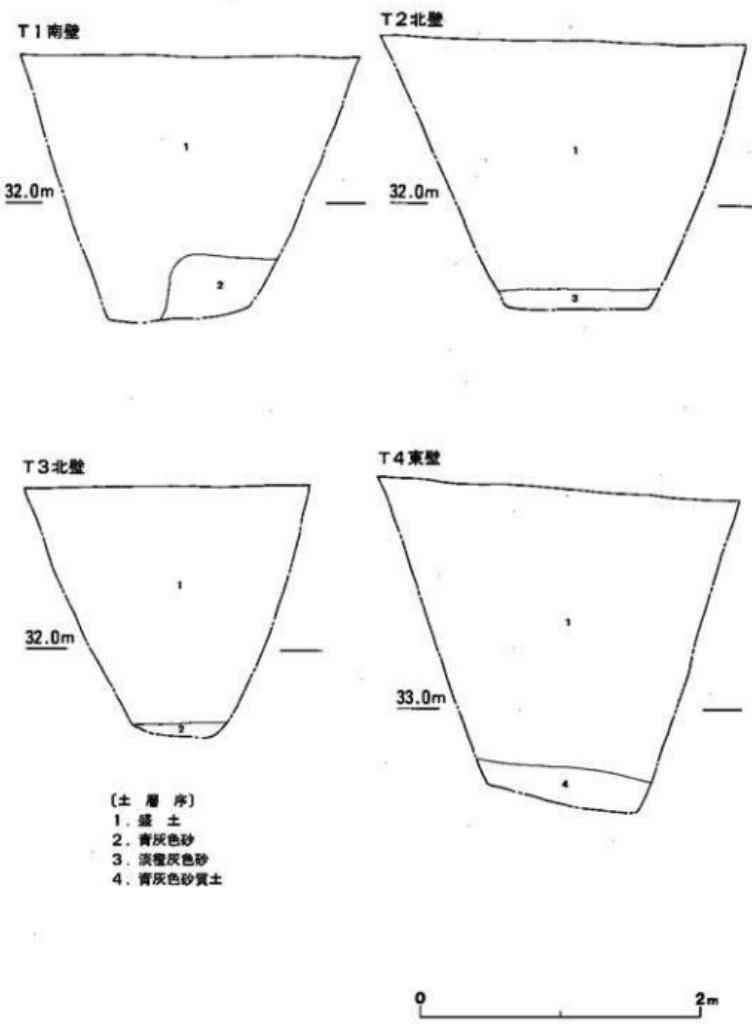
調査の成果としては、やはり当地における造成のため、旧地形を認めることは出来ず、厚い盛土に覆われており、その下より、若干色調は異なるが、地山と考えられる灰色系の砂層及び砂質土層が確認できた。そして、明確な遺構・遺物については検出することは出来なかった。



第11図 吹田37号須恵器窯跡発掘調査地周辺図 (1:5000)



第 12 図 調査区平面図



第 13 図 調査区土層断面図

第5章 垂水南遺跡の発掘調査

1. 吹田市垂水町3丁目28-10における試掘調査（第1期）

（1）調査の経過

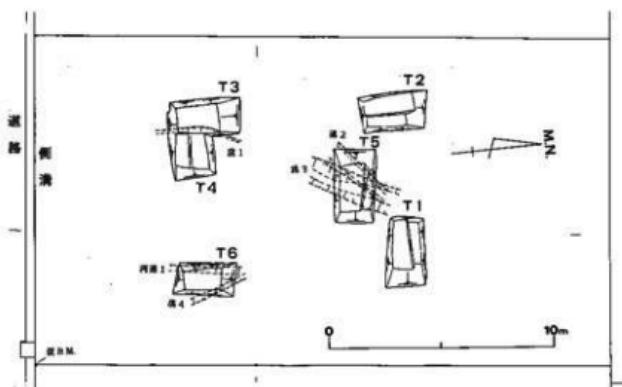
今回の試掘調査は、平成4年11月10日から11Hにかけて、吹田市垂水町3丁目28-10で行った。当地における開発計画に伴い、事前に調査を実施したものである。調査は、工事予定地内に約 2×3 mの試掘トレンチ6か所（T1～T6）を設定し、重機及び人力により注意深く掘削した。そして、トレンチ内の検出状況について詳細に観察し、写真撮影、土層断面図・平板測量図の作成等の記録作業を行ったのち、埋め戻して旧状に復した。

（2）調査の成果

調査地内の土層序は、厚さ約20～40cmの碎石層・表土層（第1・2層）以下、黄色粘質土層（現代盛土層、第3層）、黒灰色砂質土層（旧表土層、第4層）、暗灰色粘土層（第6層）、淡灰色粘土層（第7層）、淡緑灰色粘土層（第8層）、淡灰色細砂と淡灰褐色粘土との混合層（第9層）、灰褐色粘土層（第10層）、淡黒灰色粘土層（第11層）、暗灰色粘土層（第12層）、黒灰色粘土層（第15層）、灰色細砂層（第18層）、淡灰色細砂層（第19層）、灰色シルト層（第20層）などの粘土・粘質土を主体とする層



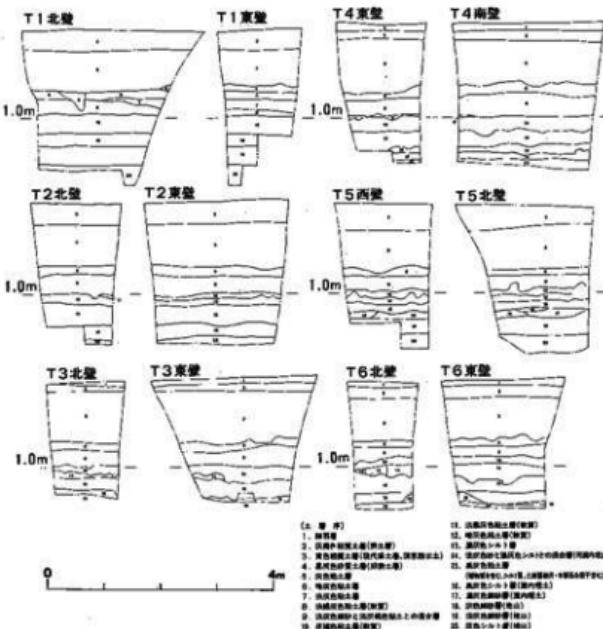
第14図 垂水南遺跡発掘調査地周辺図 (1:5000)



第15図 第1期調査区平面図

が水平方向に堆積する状況が観察できた。

このうち、第18層上面からは、T3より南北方向の溝1条（溝1）、T5より南北方向の溝2条（溝2・3）、T6より同じく南北方向の溝1条（溝4）を検出し、第15層をベースとして、河道1条（河道1）を検出した。溝についてはいずれもシルトや細砂などの土砂の堆積が認められたが、いずれ



第16図 第1期調査区土層断面図

護岸施設などの人为的な構造物が検出されなかったことや溝1のように、東岸が検出されなかつなど固定した流路を形成していたとは考えにくいことから、いずれも一時的な自然流路と考えられる。

出土遺物については、第15層等から古墳時代の土器や建築材と考えられる板、大足の細片などの木製品が出土した。しかし、これらの遺物はいずれも磨滅した細片であり、遺構面に定着するものではなかったことから、他所から流れ込んだものと考えられる。

(3) まとめ

今回検出した溝及び河道については、遺物が伴わなかったことから時期については特定することはできなかったが、溝1～4については、上層（第15層）等の土器の出土状況から古墳時代前期のものと考えられる。また河道1については、当調査地南側の垂水南遺跡第42次発掘調査地点内の東端で検出された平安時代のものと考えられる南北方向の河道の延長線上に位置しており、これが今回の調査地まで伸びていることが想定できる。このことから、河道1については平安時代の所産と考えられる。

2. 吹田市垂水町3丁目26-4における試掘調査（第2期）

(1) 調査の経過

今回の試掘調査は、開発計画に伴う事前確認調査である。吹田市垂水町3丁目26-4において、平成4年12月18日に実施した。調査は、工事予定範囲を対象として約 2×2 haの調査区3か所(T1-T3)を設定し、重機及び入力により注意深く掘削した。そして、調査区内の検出状況について詳細に観察し、写真撮影、土層断面図・平板測量図の作成等の記録作業を行ったのち、埋め戻して旧状に復した。

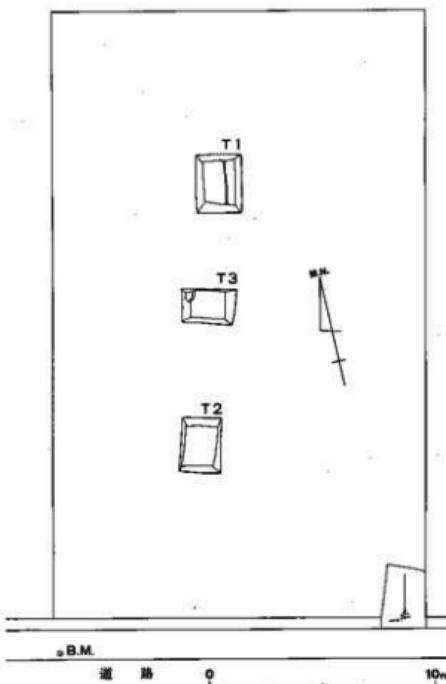
(2) 調査の成果

調査地内の土層序は、厚さ約20cmの耕土層(第1層)以下、灰色砂質土層(第2層)、明瞭色砂質土層(第3層)、淡灰色粘土層(第4層)、淡黄灰色粘土層(第5層)、淡灰褐色粘土層(第6層)、暗灰色粘土層(第7層)、濃灰色粘土層(第8層)、灰色粘土層(第9層)、黒色粘土層(第10層)、褐色シルト層(第11層)、灰色細砂層(第12層)など、の軟質の粘土を主体とする層が水平方向に堆積する状況が観察できた。

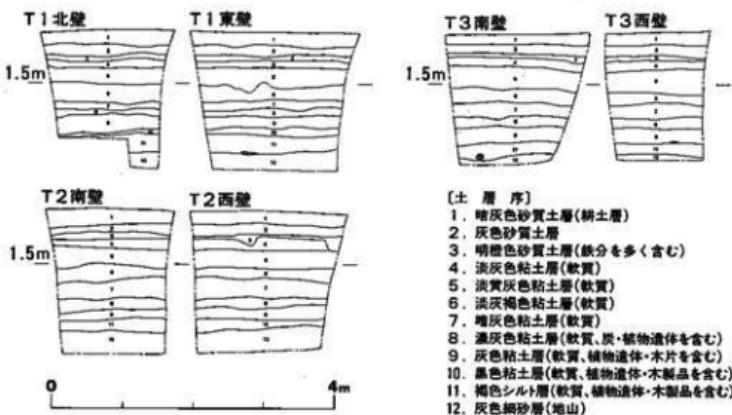
今回の調査では、明確な遺構は検出されなかったが、出土遺物については、T1・3第10・11層より精密な加工を施した木製品が多数出土した。

(3) まとめ

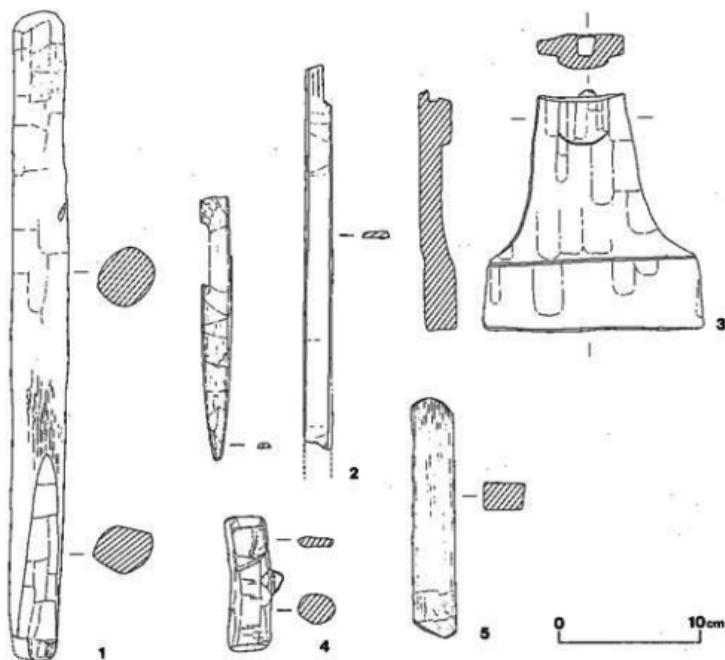
今回の調査において出土した木製品は、土器を伴わなかったため、その時期については明らかにできなかつたが、これまでの垂水南遺跡の土層の堆積状況からみて、古墳時代の所産と考えられる。また、当調査地の西側には古墳時代の集落遺構の集中する地点が隣接しており、これらと深い関わりのある遺物群であると考えられる。



第17図 第2期調査区平面図



第 18 図 第 2 期調査区土層断面図



第 19 図 第 2 期調査区出土物実測図

第6章 垂水遺跡の発掘調査

1. 調査の経過

今回の調査は、個人住宅の建築工事に伴う事前調査として、吹田市円山町1667-5を対象に、平成4年12月16日に実施した。調査は、工事予定地内に約 2×2 mの調査区を3か所(T1~T3)設定し、人力により注意深く掘削した。そして、調査区内の検出状況について詳細に観察し、写真撮影、土層断面図・平板測量図の作成等の記録作業を行ったのち、埋め戻して旧状に復した。

2. 調査の成果

調査地内の土層序は、厚さ約1.0cmの表土層(暗褐色砂質土層)以下、現代盛土層と考えられる灰白色砂層(第2層)・黄色砂層(第3層)がみられ、続いて淡黄色細砂層(第4層)、橙褐色砂質土層(第5層)、淡灰色粘質土層(第6層)、淡黄色砂質土層(第7層)、淡青灰色粘質土層(第8層)、青灰色シルト層(第9層)、黄褐色砂層(第10層)、暗褐色粘質土層(第11層)、黄褐色砂層(第12層)などの砂・粘質土等を主体とする土層がやや斜方向に堆積し、地山である淡橙色砂層(第13層)、淡灰色細砂層(第14層)、淡黄灰色細砂層(第15層)に達する状況がみられた。



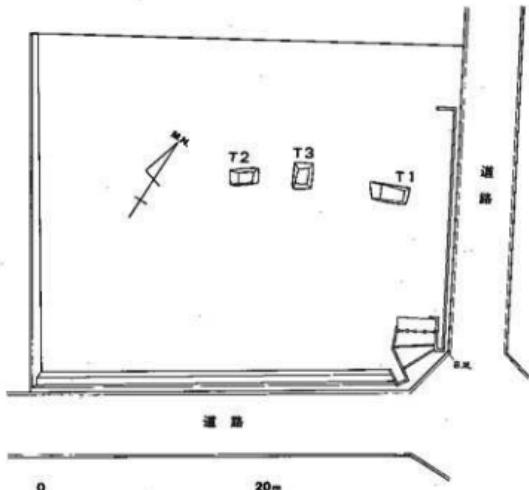
第20図 垂水遺跡発掘調査地周辺図 (1:5000)

3. まとめ

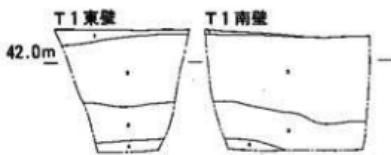
今回の調査では、第6~9、11層を除き、いずれも軟弱な砂を主体とする層で構成されていた。このうち、第1~5層には白色の粘土が塊状に多数含まれており、また第6~9、11層についても洪積世層と考えられるシルト・粘質土層で構成されており、これらが傾斜面に沿って流れ込んだような堆積状況を示していた。このことから、調査地内の土層序は近年の宅地造成の際に攪乱を受けた層位で構成されていると考えられる。

次に遺物については、T2第9層から弥生式土器2点(腰の口縁部・底部)が出土した。しかし、いずれも磨滅した細片であり、擾乱層からの出土であることから、宅地造成時に他所から混入したものと考えられる。なお、出土遺物は数量が非常に少なく、いずれも細片だったことから明確ではないが、弥生時代後期(畿内第V様式)頃の所産と考えられる。これまで垂水

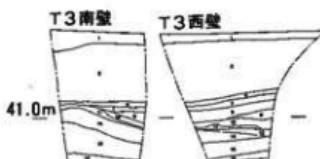
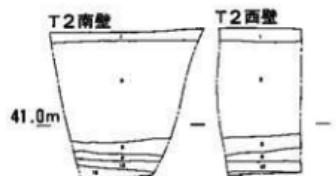
遺跡では、昭和41年以来数次にわたる発掘調査を実施してきた。近年は発掘調査の進展に伴い平野部にも遺構が広がることがわかつてきたが、丘陵部においては度重なる開発のため、遺物の検出も困難であった。今回の土器の出土は2点であったが、擾乱土中に遺物が埋没している可能性を示唆しており、垂水遺跡の弥生時代の集落の性格を考える上で貴重な成果と考えられる。



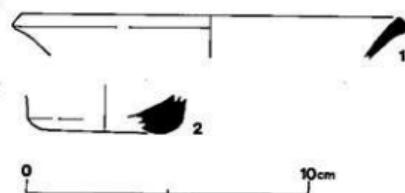
第21図 調査区平面図



- 【土層序】
1. 喀褐色砂質土層(表土層)
 2. 灰白色砂層(現代盛土層)
 3. 黄褐色砂層(現代盛土層、白色粘土壤を多く含む)
 4. 淡黃色細砂層
 5. 暗褐色砂質土層
 6. 淡灰色粘質土層
 7. 淡黄色砂質土層
 8. 淡青灰色粘質土層
 9. 青灰色シルト層(土器破片出土)
 10. 黄褐色砂層
 11. 喀褐色粘質土層
 12. 黄褐色砂層
 13. 淡褐色砂層(地山)
 14. 淡黄色細砂層
 15. 淡灰色細砂層(地山)
 16. 淡青灰色細砂層(地山)



第22図 調査区土層断面図



第23図 出上遺物実測図

第7章 吉志部遺跡の調査

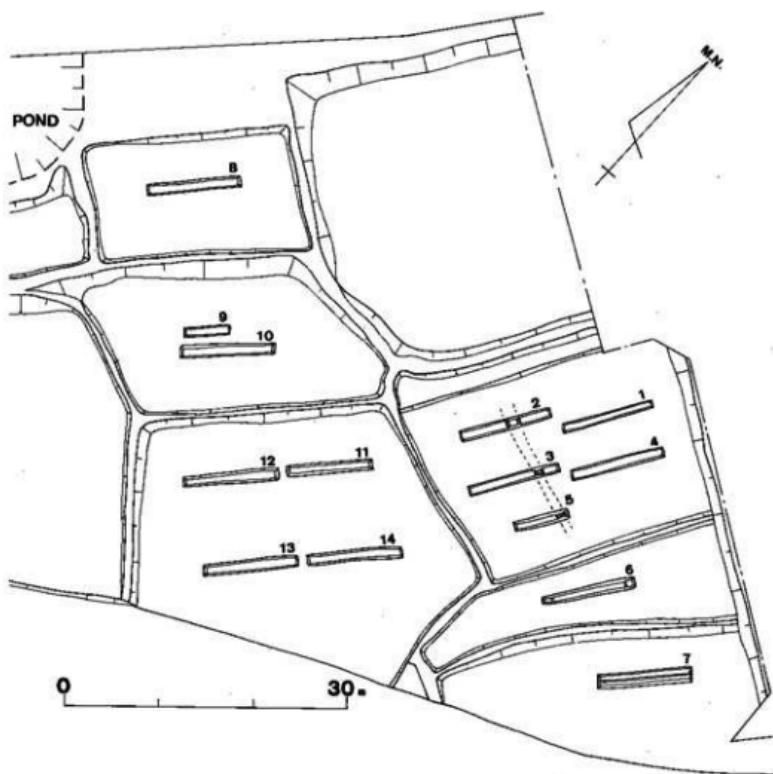
1. 調査の経過

吉志部遺跡は千里丘陵の東南端の標高20~30mの南に緩やかに傾斜する地点に形成された遺跡である。現在、周辺地は宅地化され、遺跡自体も水田として早くに造成されていることから、旧地形の景観は認められないが、丘陵端部の大坂平野を一望する展望の良い地点に立地している。吉志部遺跡では土地所有者の関本氏によって東西100m、南北50mの範囲においてナイフ形石器、錐状石器、楔形石器、搔器、削器、剝片、石核等の旧石器と縄文時代草創期の有舌尖頭器、縄文時代の石鎚、石錐等約300点の石器が採集されており、1981年刊行の吹田市史第8巻に秋枝芳、山口卓也両氏によって資料化された。

今年度の吉志部遺跡の調査は遺構の展開状況及び遺物の包蔵状況を確認することを目的として、約2594m²の範囲に14ヶ所のトレンチ（T 1 ~ T 14）を設定した。調査面積は計134m²である。

調査は通算第6次の調査であり、平成5年1月19日から開始し2月12日に終了した。





第25図 調査区平面図

2. 調査の成果

a. トレンチ調査の成果

T 1～T 5

T 1～T 4 は $1 \times 10\text{m}$ 、T 5 は $1 \times 5\text{m}$ のトレンチである。各トレンチの土層序は耕土、床土層以下第3層までは水田開発に伴う整地層であり、以下の各堆積層が開発以前の堆積層と考えられる。第3層、5層及び9層から古墳時代及び鎌倉時代を主とする中世の遺物が出土するが、いずれも細片で器表面も摩滅しており、2次堆積の資料である。また、T 2、3、5において斜面上方から下方へ向かう（北西から南東）幅1.1～1.5m、深さ0.45～0.5mの溝を検出した。T 2 では第5層から、T 3、5 では地山層から掘り込まれている状況であるが、T 3 および5ではベース層である第5層が削平されたものと考えられる。溝内からは T 5、暗灰色砂質

上層から微量の土師器細片が出土し、T 3においては溝堆積土最上層の黒灰色粘土層上面に密着して東播系須恵器捏鉢の体部が出上したのみであることから溝の時期について断定はできないが、中世に掘削されたものである可能性が高いと考えられる。

T 6

1×10mのトレンチ。第6層をベース面とする、幅1.3m、深さ0.5mの溝を検出する。T 2、T 3及びT 5で検出した溝のはば延長線上にあたり同一の溝の可能性が高い。第3層から中世の遺物が出土するが、第6層以下では遺物は出土していない。

T 7

調査地の最も低い地点に設定した1.5×10mのトレンチ。第2層以下は地山直上層まで整地層と考えられる。

T 8～T 10

T 8及びT 10は1×10m、T 9は1×5mのトレンチ。各トレンチとも第2層直下で地山層を確認した。T 10では第2層から有舌尖頭器（第28図1）、盤状剝片（第28図4）が出土した。

T 11～T 14

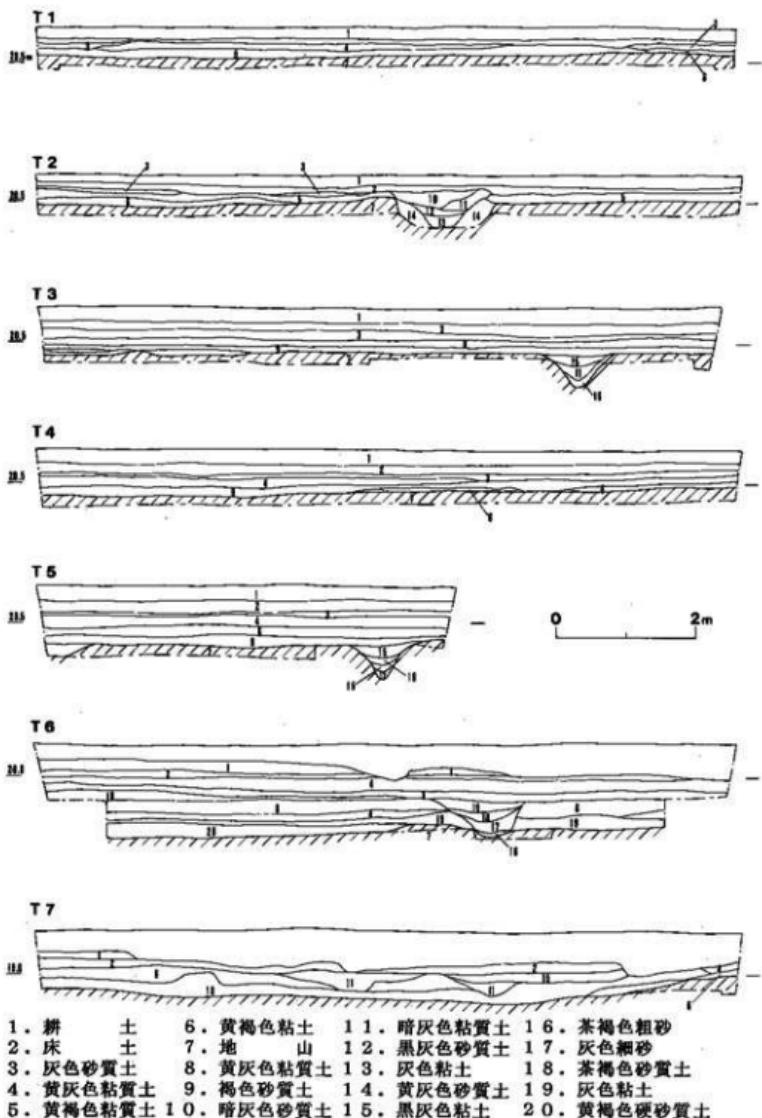
T 11及びT 12は溜池部分であり、堆積層はいずれも埋め立てられたものであり、T 14についても地山上層まで開発に際しての整地層である。

T 13では第6層から加工痕有剝片（第28図3）がT 14、第21層から横長剝片石核（第28図5）が出土している。

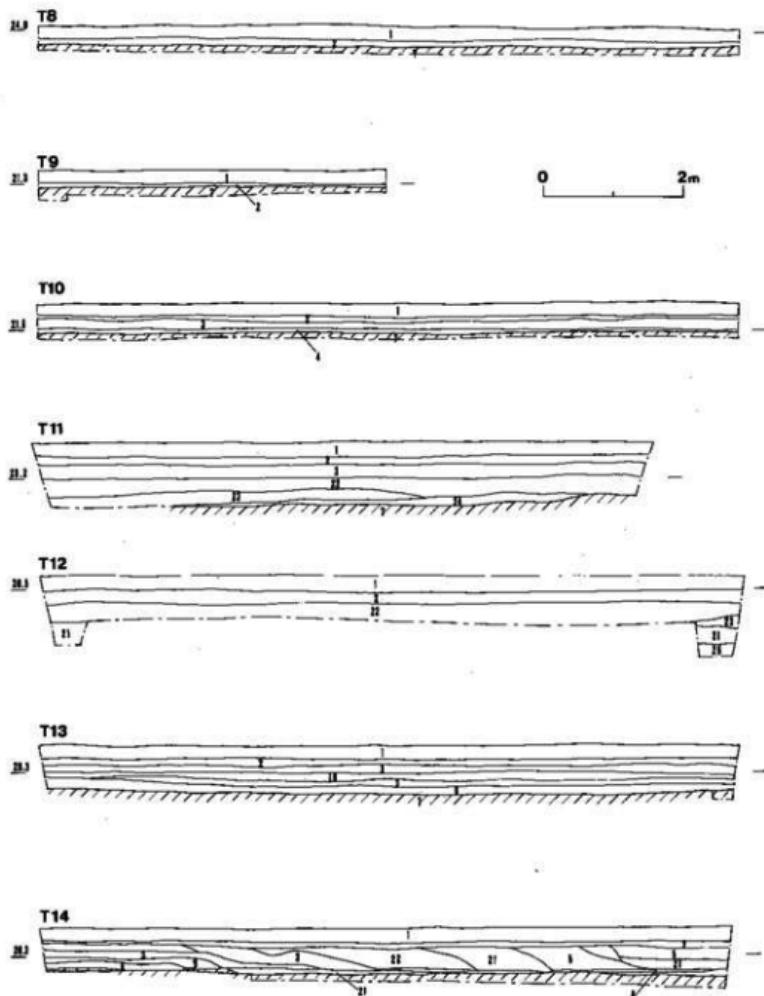
今回の調査の結果、剝片及び石核等の旧石器時代の資料や縄文時代草創期の有舌尖頭器等の注目すべき資料の出土もみたが、いずれも2次堆積の資料であり、調査地の北西側部分は水田開発に際して旧地形は大きく削平されており、斜面下の東南側部分についても大きく盛土されていたことから水田開発以前の堆積層も一部確認できたが、その堆積状況から中世以降に大きく削平されていることが確認された。調査の目的であった旧石器時代の包含層については、これまでの通算6次にわたる調査の結果から遺跡の北西端の一部及び南北部分で確認される可能性が高いが、他の地域については中世以降の一帯の開発によって既に大部分が削平されているものと判断される。中世遺物については、細片ではあるが土師器、瓦器（和泉Ⅲ型式）、中国製青磁（龍泉窯系）等が認められ、中世遺構の存在したことが予想されるが、検出した溝にみられるように後世に削平されている可能性が高いと考えられる。確認した溝については後世に削平されており、その性格等は明かではない。斜面上方から下方に流下するもので排水機能をもったものと考えられるが、耕地の灌漑用か集落に付属するものは断定できない。

b. 出土遺物

出土した遺物の内、土器についてはいずれも2次堆積の資料であり、古墳時代須恵器、中世土師器小皿、瓦器（和泉Ⅲ型式）、土師質土釜、須恵器捏鉢、中国製青磁（龍泉窯系）等、中世の遺物が中心であるが、細片であることから図示できるものはなく、以下、石器についての



第 26 図 調査区土層断面図(1)



1. 耕 土 5. 黄褐色粘质土 18. 茶褐色砂质土 24. 青灰色砂
 2. 床 土 6. 黄褐色粘土 21. 黄色粘土 25. 淡灰色粘土
 3. 灰色砂质土 7. 地 山 22. 黄灰色粘土
 4. 黄灰色粘质土 9. 棕色砂质土 23. 黄灰色粘土

第 27 図 調査区土層断面図(2)

説明を行う。

石器（第28図）

調査で確認した石器類には、有舌尖頭器、石鎌、加工痕有刺片、盤状剝片、横長剝片石核等がある。また、やや風化の浅い不定形剝片も若干出土している。いずれもサヌカイト製である。

1は、有舌尖頭器である。T10第2層出土。長さ56mm、幅21.5mm、厚さ6mm、重さ6.8gを計る。身部は両側縁とも緩い弧状を呈し、逆刺は覗く、基部側へ突出している。舌部抉りは広く、対称となっている。押圧剝離が顕著で、表面右半には斜平行する剝離痕が認められる。鋸齒縁状の側縁とはなっていない。

2は、表採資料の石鎌である。長さ19.5mm、幅17mm、厚さ2.5mm、重さ0.8gを計る。非対称で、右半基部が覗く尖っている。基部左には僅かに突起があり、形態的には極小有舌尖頭器とも見なし得るもので、縄文草創期に属する可能性がある。

3は、加工痕有刺片である。T13第6層出土。長さ50mm、幅33mm、厚さ14.5mm、重さ15.0gを計る。右側縁に大きく自然面を残すが、横長剝片素材で、背面に僅かに残った打面から考えて、大型剝片の側縁から剝離されたものと考えられる。左側縁の自然面を背面側からの調整によって一部除去している。加工を粗い背溝し加工とみると、ナイフ型石器未製品の可能性がある。

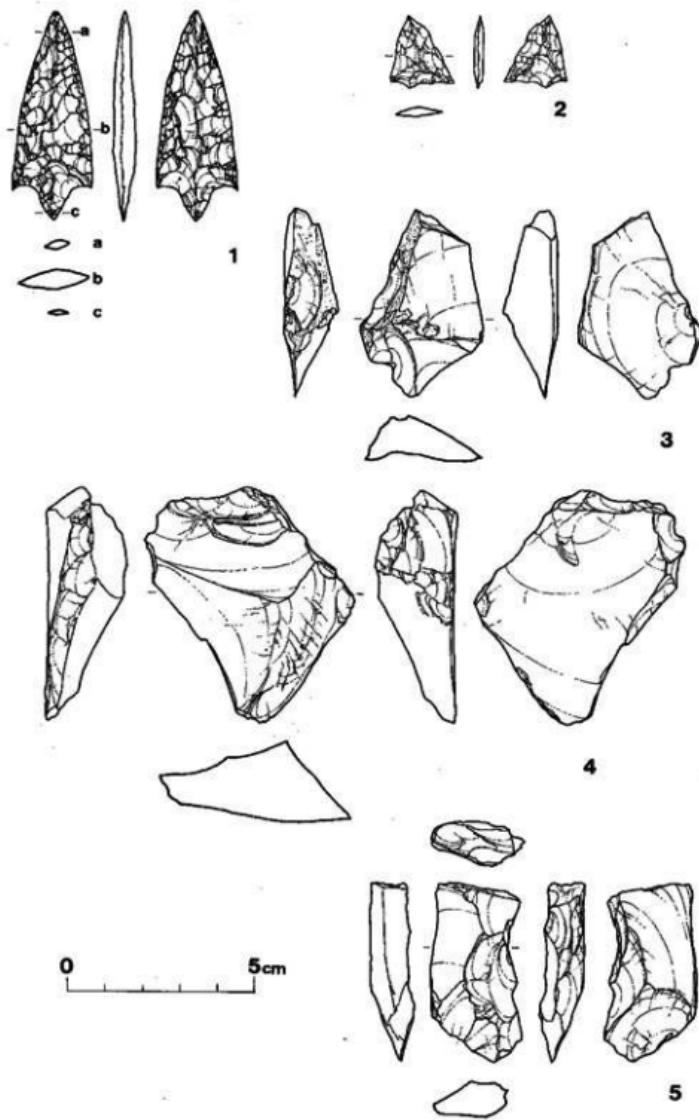
4は、盤状剝片である。T10第2層出土。長さ63mm、幅56.5mm、厚さ22mm、重さ49.8gを計る。打面調整を入念に施した大型剝片である。剝離後、左側縁が広く切断されている。

5は、横長剝片石核である。T14第21層出土。長さ48mm、幅24.5mm、厚さ12mm、重さ15.2gを計る。石核素材剝片の打面部分側に作業面を設定し、表裏逆転しながら剝片生産を統一、作業面上を左右したもので、最後に石核末端左で底面から剝離が行われたものである。いわゆる、櫛石島型の横長剝片石核である。

今回出土した石器類は、有舌尖頭器以外特に所属時期の限定できる定型石器資料はないが、あえて形態的特徴から大別すれば、有舌尖頭器と石鎌は縄文時代草創期、加工痕有刺片と横長剝片石核はナイフ型石器文化の時期の所産と見なせよう。従来の調査や関本良太郎氏による採集資料にも、同様の石器類が多く認められることから量は少ないながら吉志部遺跡の中心的な石器群を検出したと考えられる。

3.まとめ

関本氏の採集活動によって旧石器及び縄文草創期の石器資料が明らかにされたことを受けて、昭和55年度から実施した吉志部遺跡の調査は今まで通算6次におよぶが、その調査の目標としたのは、遺跡の構造・遺物の包蔵状況の確認、文化層の層位的把握、遺物の原位置の確認及び記録が可能な良好な包蔵地点の検出であった。調査の結果は遺跡の大半は中世に大きく開削され、さらに現代の水田の開発に伴い大きく削平されている可能性が高いことが明かとなっ



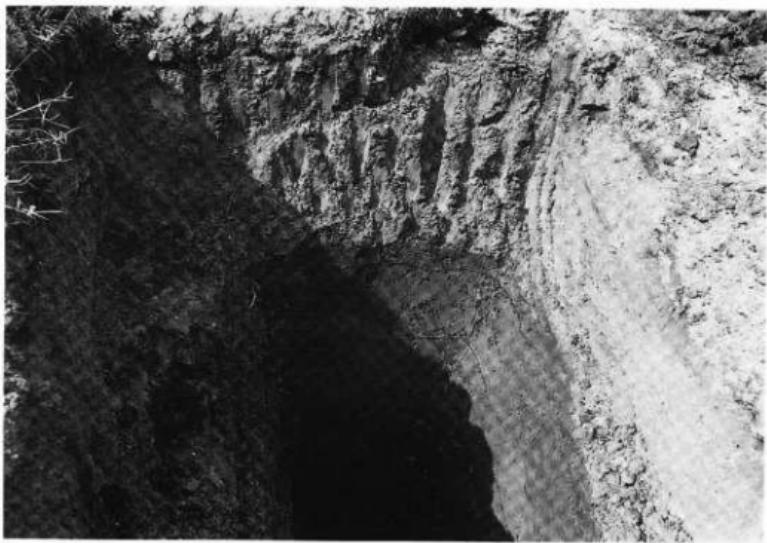
第28図 石器実測図

た。遺跡の状況の確認ということでは、吉志部遺跡の中心的な石器群を検出したことから一定の成果は挙げたといえるが、文化層及び良好な原位置を示す包蔵地点は明確にはできず、今後の課題として残された。今回の調査で出土した石器は時期的な幅が認められ、數次期の文化層の存在を予想させるものである。有舌尖頭器は吉志部遺跡では2次堆積資料であるが、今回の調査資料を含めて10点が確認されており、その多くは遺跡東部で出土している。吉志部遺跡での有舌尖頭器の出土状況は、単独の検出例が多い畿内以西においては特異な状況といえ、本遺跡の性格を考える上でも重要な資料である。また、今回の調査においても縄文土器は確認されず、従来、指摘されていたように吉志部遺跡の縄文時代の性格についてはキャンプサイトとしての性格が想定されよう。なお、平成5年1月から3月にかけて実施した第5次調査では遺跡南西部部分で部分的な調査ではあるが良好な包蔵状況を確認しており、吉志部遺跡の性格をより明らかにするために今後も周辺地域の調査が必要である。

今回の中世遺構の検出及びこれまでの調査において、中世遺物の出土も比較的まとまって認められることも注目すべき成果であろう。検出した溝については延長20m以上にわたって確認され、斜面上方から下方に向かって流れ込むものである。その性格については、他に柱穴等の遺構が認められないことから耕作地における灌漑ないしは排水の機能を持ったものとも考えられ、一帯の中世における耕地等の開発状況を示すものといえる。しかし、中国製青磁を含む中世遺物が比較的まとまって出土していること及び中世以降に一帯が大規模に開削され、遺構が削平されている可能性も高いことから、屋敷地の存在も否定はできないと考えられる。出土遺物はいずれも細片が多いが、土師器、瓦器、中世須恵器等の日常雑器以外にも中国製磁器も出土しており、時期的には瓦器楕からは13世紀後半を中心とする。吉志部遺跡以外にも吉志部瓦窯跡隣接地点及び七尾瓦窯跡隣接地点等千里丘陵東南端裾部分から吹田操車場遺跡等のような沖積地にかけての岸部地区の広い範囲で13世紀後半を中心とする遺構・遺物が確認されており、現状では明確には確認されていないが、まとまった規模の集落の存在が予想される。これについては承平七年（937）、「醍醐雜事記」に記載の見られる吉志莊内には中世にもまとまった集落の存在が予想され、遺物の出土状況から予想される集落との関連の検討が今後の課題である。



調査地近景



T1 調査状況(東から)

図版二
豊鳴郡条里遺跡(第2期)



T1 東駐土層断面(西から)

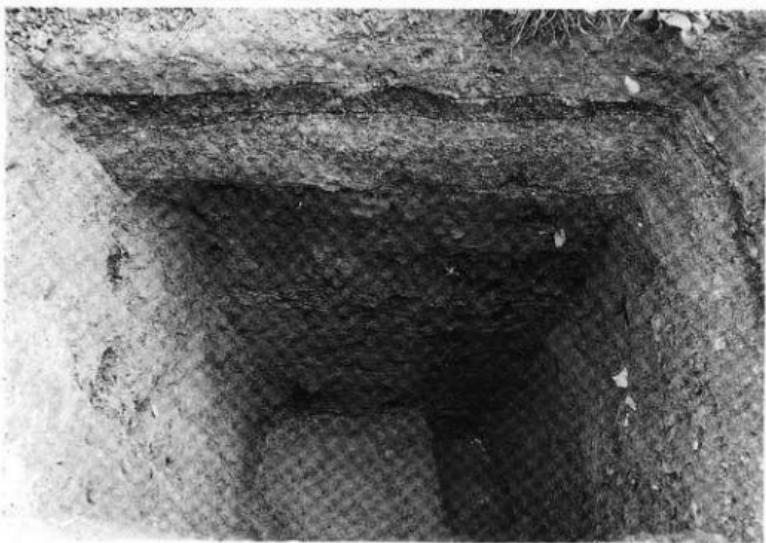


土坑1・2 検出状況

圖版三 吹田35·36號須惠器窯跡



T1 西壁土層斷面

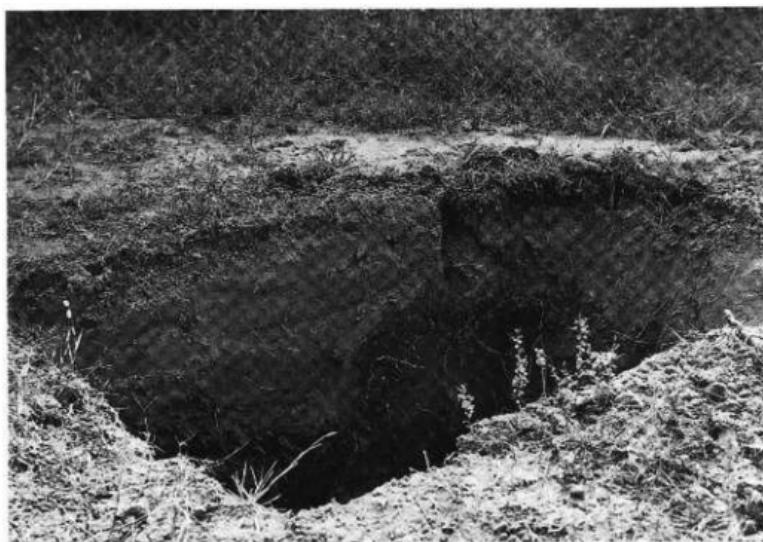


T2 南壁土層斷面

図版四
吹田37号須惠器窯跡



調査地近景(北から)



T1 調査状況(北から)



T2 北號土層斷面

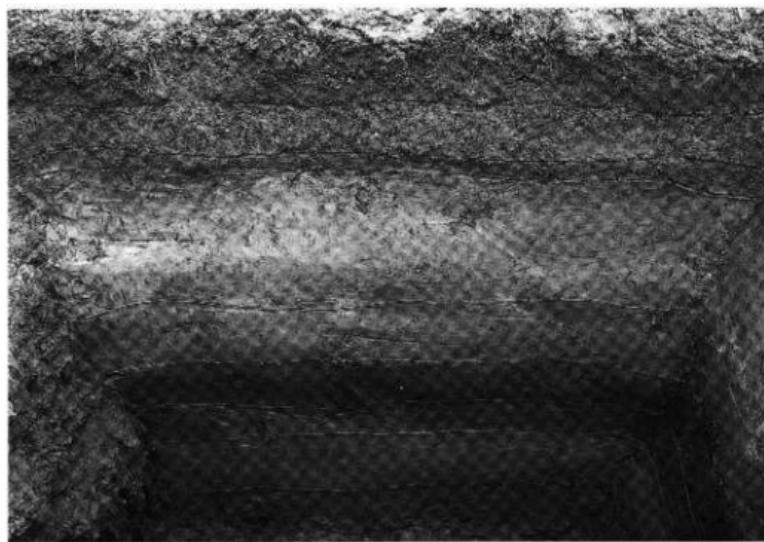


T6 北號土層斷面

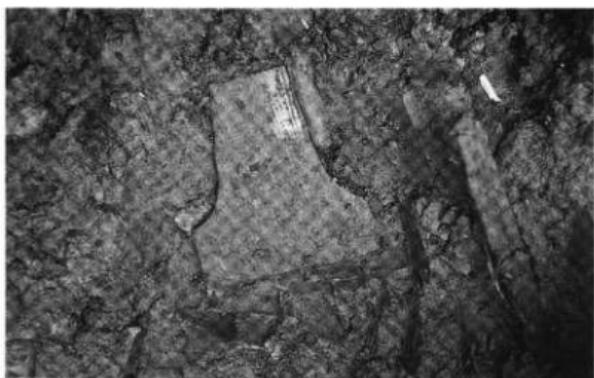
圖版六 垂水南遺跡（第2期）



T1 東壁土層斷面



T3 南壁土層斷面



本要素(3)の出土状況



3



1

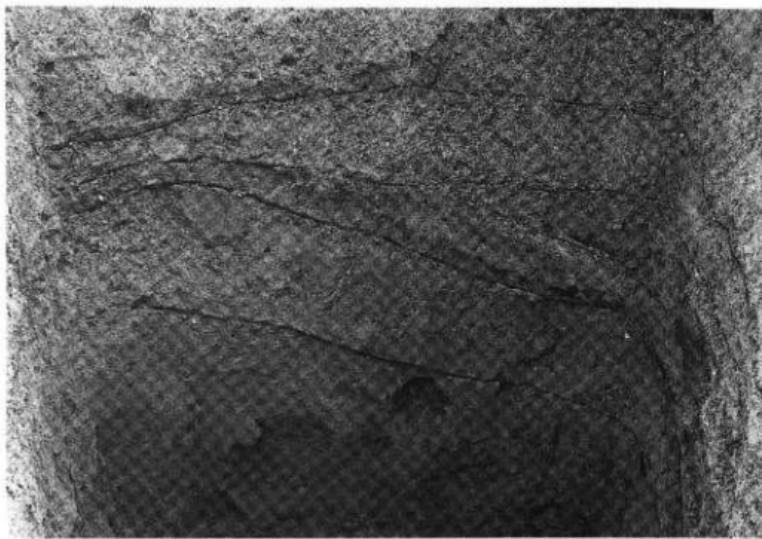


2

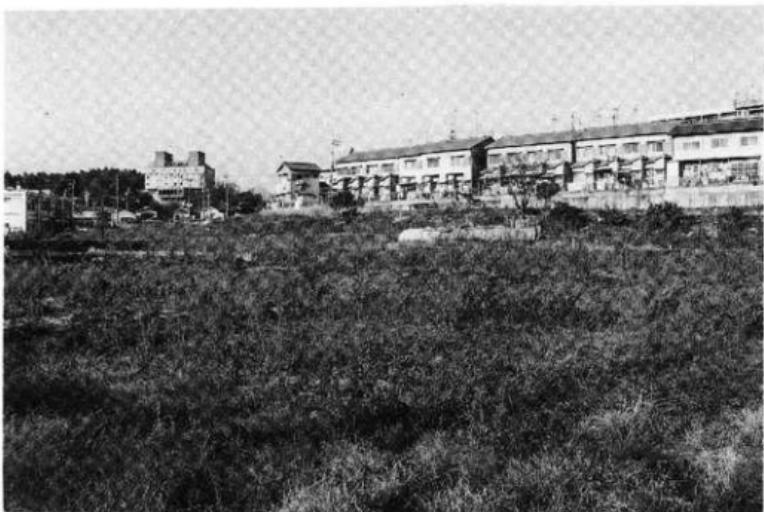
圖版八 垂水遺跡



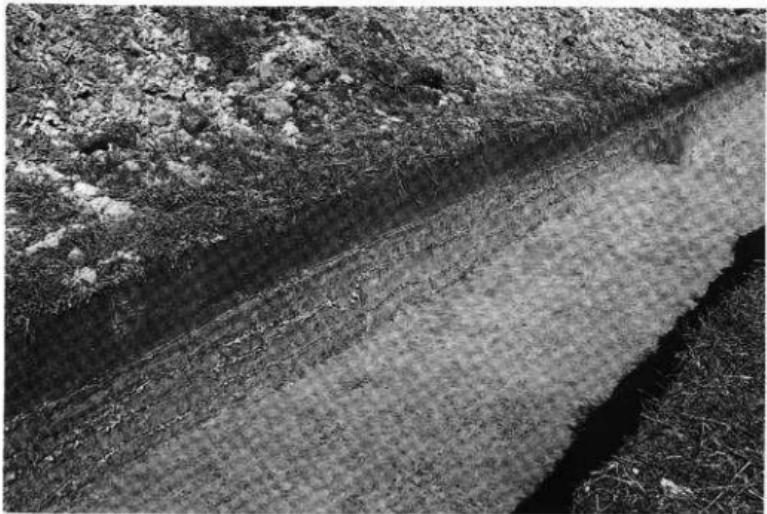
T2 南壁上層斷面



T3 南壁土層斷面



調査地近景(東南から)



T2 調査状況(南から)

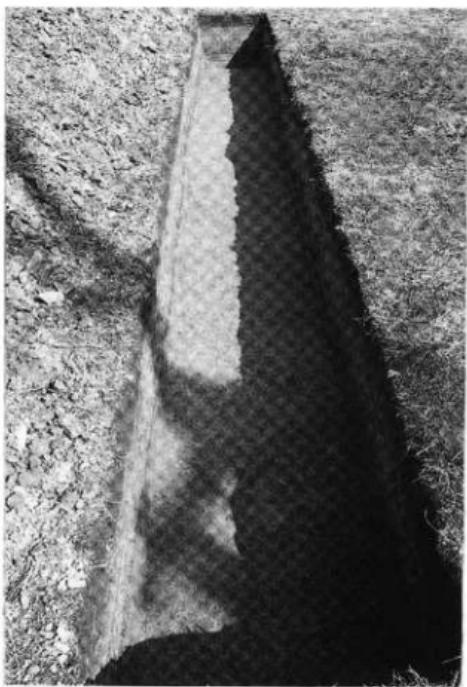


T5 溝検出状況(東南から)

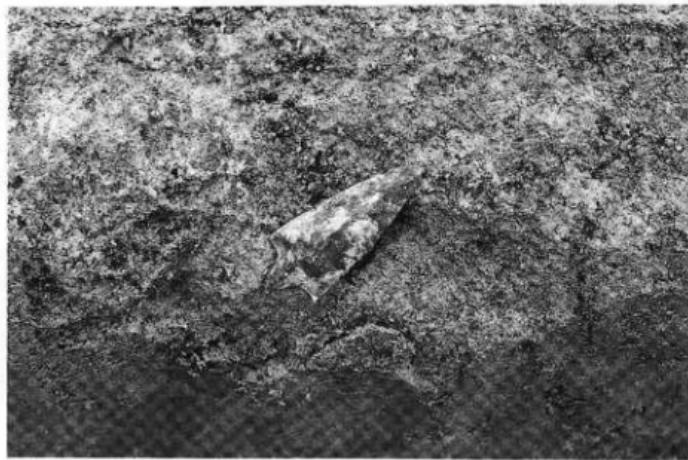


T10 調査状況(南から)

圖版十一 吉志部遺跡



T13 調査状況(南西から)



有舌旁彌器出土状況(T11)



1



2



3



4



5